

令和 6 年 6 月 28 日現在

機関番号：83803

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00208

研究課題名（和文）環南シナ海・インド洋海域が育む近世螺鈿の諸相と貝文化圏の構想 シェルロード

研究課題名（英文）Research on shell culture formed by mother-of-pearl inlay lacquerware in the South China Sea and Indian Ocean region

研究代表者

内田 篤呉（Uchida, Tokugo）

公益財団法人岡田茂吉美術文化財団（学芸部）・学芸部・館長、業務執行理事

研究者番号：00426438

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：沖縄、ハノイ、フエ、ホーチミン、フーコック島、バンコク、アユタヤ、プーケット島の螺鈿技法及び素材の調査、ベトナム古文書、ヤコウガイの科学調査を実施。その成果はベトナムのA・ヴァン博士と共著「ベトナム・フエ宮廷古物博物館所蔵の螺鈿作品」、タイ・サイアム大学教授・高田知仁著「一八世紀タイ国の寺院扉における説話と螺鈿文様」を学会誌『漆工史』第45号（2023）に発表。文献調査はベトナム螺鈿の起源を通説の15世紀から11世紀に遡る史料（テキストクリニック中）の採録、同海域で採取したヤコウガイ貝殻の科学分析の結果、生息海域別のグルーピングが可能であり、Nd同位体比の科学分析調査を準備している。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ベトナム螺鈿の研究は未成熟の状況で、制作年代の判明する基準作も知られていない。フエ宮廷古物博物館蔵の螺鈿寝台は阮王朝紹治帝が宮廷で使用し、黒漆地螺鈿を木地螺鈿に改変した新知見を得た。この作品はベトナム螺鈿史を構築する上で編年の基準となり、ベトナムの木地螺鈿がはじめから木地に貝を埋め込んだという通説を否定した。ヤコウガイ貝殻の微量元素の科学分析は産地の差異を推定できる可能性を見出した。さらにアサリの産地偽装を解明したNd同位体比の手法で、ヤコウガイ貝殻の科学分析による産地同定法の開発に着手し、美術史では解明できない作品の制作地を科学調査で解明する手法を開発している。

研究成果の概要（英文）：I carried out fieldwork in Okinawa, Hanoi, Hue, Ho Chi Minh City, Phu Quoc Island, Bangkok, Ayutthaya, and Phuket Island. The main research included techniques and materials of Raden (mother-of-pearl inlay), ancient Vietnamese documents, and scientific research on the great green turban shell. The results include the publication of "Raden Works from the Collection of the Hue Royal Antiquities Museum, Vietnam," co-authored by Dr. Anh Van, and Dr. Tokugo Uchida, and "Stories and Raden Designs on Temple Doors in 18th Century Thailand," by Tomohito Takata, Professor at Siam University, in the academic journal "History of Lacquer Works No.45" in 2023. The literature survey found historical documents that show that Vietnamese Raden date back to the 11th century from the 15th century. Scientific analysis of the great green turban shells has shown that they can be grouped according to their habitat, and our research group is currently preparing to conduct neodymium isotope analysis.

研究分野：美術史

キーワード：環南シナ海インド洋 ヤコウガイ ベトナム螺鈿 タイ螺鈿 同位体分析 木地螺鈿 ストロニウムネオジウム

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

輸出漆器は、日本と西欧諸国の二元的な視点の研究に偏重してきた。そのため、日本と欧州の間に広がる環南シナ海・インド洋海域における漆工品の詳細な研究は少なく、日本から東南アジア全体に視野を広げた螺鈿史研究は未着手の状況である。特にベトナムとタイには螺鈿の作品が多数現存するが、両国の螺鈿の起源は未詳で、体系的な螺鈿史の構築に至っていない。本研究では、螺鈿の伝播と貝の交易を通じて、環シナ・インド洋海域を包括する広大な螺鈿文化圏を仮設し、その海域における近世螺鈿の解明を目指した。第1期では東西交流の通過点に位置するタイとベトナムに焦点を当て、螺鈿作品の調査と技法の調査を進めた。ベトナムとタイは、螺鈿の産地である中国・日本・琉球に近いことから多角的な関係性を見出す可能性が高いと考えられる。

### 2. 研究の目的

(1)日本と欧州の間に位置するベトナム・タイの螺鈿工芸の種類、形状、図様様式に見られる特徴を明らかにすること。

(2)当該地域で制作された螺鈿作品の技法を明らかにし、技法的特徴を明らかにして、地域別の比較を通して技法研究を行うこと。

(3)螺鈿の美術史のおよび技法的調査、さらにヤコウガイ貝殻の科学分析から得られる知見を基に、その作品との関係性を通じて地域間の交流の実態を解明すること。

以上の目的を達成するために、第1期はベトナム・タイを主な研究対象の地域とした。これまで単なる寄港地として顧みられることのなかった地域の螺鈿に注目し、その美術様式や技法の詳細な特徴の解明を試みる。また地域間のつながりを多角的な関係性から再構築することを目指す。

### 3. 研究の方法

研究の方法は、ベトナム、タイ、日本、中国の螺鈿作品を対象に制作技法・素材・図様の調査及び古文書調査を通じて、各地域の螺鈿の歴史の変遷と社会的・対外的位置づけを解明する。特に制作技法については、重要無形文化財「蒔絵」保持者の技法調査に加え、ヤコウガイ貝殻のサンプルを採取し科学分析を行うこと。素材の科学分析から地域間の螺鈿文化の伝播経路とその歴史の解明を試みる。本研究は広範な地域を対象とするため、研究期間中の主要な課題を以下の通り設定した。

(1)ベトナムにおける技法と作品調査、および日本各地に所在する日本、中国螺鈿の調査

(2)タイ螺鈿の技法調査および外的要因の解明

(3)環南シナ海・インド洋におけるヤコウガイ貝殻の科学分析と産地の特性の解明

これらの課題を達成するために、美術史、文献史学、工芸史（技法）、分析科学の各分野の研究者および各地域の研究者とのネットワークを構築し、国際的な協力体制を整え、多視点的なアプローチによる研究を実践した。

### 4. 研究成果

(1)ベトナムにおける技法調査と作品調査

ベトナム調査の成果は、漆工史学会誌『漆工史』第45号（2023年）にフン・ティ・アン・ヴァン、内田篤呉著「ベトナム・フエ宮廷古物博物館所蔵の螺鈿作品」を発表した。2019年より重要無形文化財「蒔絵」保持者・室瀬和美の協力を得て、ベトナム・フエ市の宮廷古物博物館に所蔵されているグエン朝期の螺鈿作品を詳細に分析し、螺鈿技法およびその文化的背景を明らかにすることができた。次に、基準作品となる3点の螺鈿作品について、その技法、来歴、文化的背景、その成果について要旨を記述する。

#### 木地螺鈿寝台

この寝台はグエン王朝第三代テウチ（紹治）帝の統治時代（1841～1847）に制作された。長さ210センチメートル、幅180センチメートル、高さ50センチメートルの大型の寝台で、四隅

に竹の切り株を模した脚が付けられる。文様は団華文様と折枝の花卉文様が主体で、使用された貝はヤコウガイと推測される。技法は黒色下地を施し、その上に貝片を埋め込む厚貝技法が用いられ製作過程での細かな技術も確認された。特に貝片の周辺に黒漆が残ることから、制作当初は黒漆地螺鈿であったが、後に黒漆が意図的に除去された。この寝台は、かつてゴ・ディン・ジエム（吳廷琰）の財産であり、その後に宮廷古物博物館に移された。

#### 紫檀地日輪鳳凰螺鈿盒子

この作品は直径30センチメートル、高さ7センチメートルで、深い被蓋造の円形の盒子。文様は日輪と鳳凰、瑞雲、宝尽くしを組み合わせたもので、琉球王朝時代の日輪双鳳文様に類似する。技法は、木地に紫檀を用い、黒色の下地を施し、その上に貝片を埋め込む手法が確認された。この作品も黒漆地螺鈿が木地螺鈿に改修されている。制作時期は1890～1906年頃と推定され、タイン・タイ（成泰）帝またはズイ・タン（維新）帝の時代に制作された。

#### 黒漆地日輪鳳凰螺鈿盒子

この作品は直径30センチメートル、高さ9.8センチメートルの円形・印籠造の盒子で、総体に黒漆塗とし、内側を朱漆塗とする。文様は日輪を中心に二羽の鳳凰を相称的に配置し、石榴、梅、菊の花枝文を配している。技法は、木地に貝片を埋め込む手法が確認され、貝片の表面に線彫りと点彫りの毛彫りを施した後に黒漆を塗り、貝片の上の黒漆を剥ぎ出す方法が用いられている。この作品もタイン・タイ帝またはズイ・タン帝の時代に制作された。

ベトナム螺鈿研究の最大の成果は、グエン朝期の螺鈿作品の詳細な技法とその文化的背景を明らかにした点にある。特に、螺鈿作品の制作技法に関する具体的な証拠を提示し、黒漆地螺鈿が木地螺鈿に改修されたことを明らかにして、今後の研究に重要な基礎資料を示した。また、これらの作品が皇帝やその周辺人物によって使用されていたことを明らかにすることで、当時の社会的背景や文化的意義を浮き彫りにした。さらに、ベトナム螺鈿史の研究において、これまで明確にされていなかった時期や技法を具体的に示すことができた点も大きな成果である。これにより、ベトナム螺鈿工芸の発展過程や他地域との文化交流の影響について新たな視点を提供することができた。

こうした成果は、ベトナムの螺鈿作品に関する詳細な技法分析と文化的背景を明らかにするものであり、ベトナム螺鈿史の理解を深化させると考えられる。これにより、ベトナムの螺鈿がどのように発展し、他の地域との交流を通じてどのように影響を受けてきたのかを明らかにする新たな基礎資料を提供する。今後の研究において、これらの成果を基にさらなる研究が進展することが期待される。

### (2) タイ螺鈿の技法調査および外的要因の解明

タイ調査の成果は、学会誌『漆工史』第45号(2023)に高田知仁著「一八世紀タイ国の寺院扉における説話と螺鈿文様」を公表した。以下、その要旨を記述する。

本調査はタイ螺鈿扉史で最初期の作例である18世紀半ばアユタヤ朝末ポロマゴート王期からバンコク朝ラーマ1世期の作例を対象とする。それら作例の螺鈿文様構成および文様形式を検討し、この期間の連続性と変化、さらにその変化の意味を明らかにすると共に年代がはっきりしていない作例をタイ螺鈿史にどのように位置付けることができるか検討した。

その結果いくつかの作例が18世紀半ばからタイ螺鈿工芸史を40年ほど遡らせる可能性を指摘した。この時期の文様構成は渦巻唐草神像文と円形梓神獣文の2種類あるが、いずれも三界経を象徴的に図像化した表現であった。ラーマ1世期の扉の螺鈿文様は前時代を継承しつつ変化が見られた。三界経の主題は不明瞭化し、ラーマキエンの登場人物に徐々に置き換えられた。これは新王朝の創設後に王権を確立する過程でデーヴァラージャ思想（神王思想）によって、王位を神格化し、権威と正当性を表象する意図が込められていると見ることができる。文様形式ではラーマキエンの文様が半身像から全身像になり動的な表現になった。これらの文様形式や技法の変更はラーマ3世期に主流となるもので、したがってラーマ1世期をポロマゴート王期からラーマ3世に至る過渡期に位置付けることができる。

本研究の成果は、18世紀半ばからの螺鈿扉の文様構成および文様形式の変遷が、タイの歴史的背景や文化交流を反映していることを示した点にある。さらに、年代が不明な作例も含めて検討することにより、これらの螺鈿扉がタイの螺鈿工芸史において重要な位置を占めることを明らかにした。これによりタイ螺鈿工芸史の理解が深化し、新たな歴史的・文化的意義が付加された。

### (3) 環南シナ海・インド洋におけるヤコウガイ貝殻の科学分析と産地の特性の解明

螺鈿の素材（ヤコウガイ、アワビ、サザエ）の生産地を判別する科学的分析を行う目的で、沖

縄および東南アジア各地のヤコウガイの試料を収集した。この科学分析は、立正大学・岩崎望教授および金沢大学・長谷川浩教授に依頼し、ヤコウガイの硬組織に含まれる微量元素の予備分析を実施した。沖縄、ベトナム、フィリピン、タイ、ミャンマー、アンダマン諸島から収集されたヤコウガイ 30 個体 80 試料に共通して検出された元素は 11 種類であった。クラスター分析の結果、ベトナムと沖縄・東シナ海で大きく 2 つのグループ分類化が可能であった。

現在、クラスター分析の結果を受けて、東京都市大学・田中健太郎准教授および明治大学・本多貴之准教授の研究グループと共に、地質学的特徴を反映するネオジウム (Nd) 同位体比を指標とする貝殻の産地判別法の開発を準備している。この調査は、地球化学的知見を取り入れて、地殻年代の異なる場所の螺鈿素材のヤコウガイの Nd 同位体比を測定し、螺鈿の産地を判別するものである。この産地判別法は、地球の地殻の Nd 同位体比がその地殻の形成年代によって異なることを応用している。古い地殻ほど Nd 同位体比が低く、新しい地殻ほど高い傾向がある。陸地域の Nd 同位体比は、地殻が形成された年代を反映して不均質に分布する。地殻の風化や溶出によって供給された Nd は河川や地下水を通じて海岸部に流れ込み、そこで生息する貝類に取り込まれる。したがって、沿岸に生息するヤコウガイの Nd 同位体比は後背地の地質（主に形成された年代）に依存し、産地ごとに固有の値を持つと予想される。

このような地球化学的知見を美術史の分野に応用するため、予察的研究として、異なる地質年代を持つ国内外の産地から採集した現生ヤコウガイの貝殻の Nd 同位体比を比較し、Nd 同位体比を指標として利用してヤコウガイの産地を判別できるかの検証を準備している。Nd 同位体比の化学分析は、生物・非生物起源を問わず、有形文化財や考古遺物全般に広く応用できるため、将来的な美術史や工芸史への波及効果が極めて高いと期待される。特に、この研究は国宝や重要文化財に指定された様々な有形文化財の保存修復にも応用が可能である。さらにストロンチウム (Sr) 同位体比や鉛 (Pb) 同位体比など従来の方法と併用することで、これまでより高い精度と空間解像度で文化財の産地判別が可能であろう。

#### (4)ベトナム古文書『玉宝古伝』の採録

『玉宝古伝』は張公誠 (994? - 1099?) を祀ったチュオン・コン・タイン廟 (所在はタインホアン村、ハノイ) に伝わる神譜と考えられる。張公誠は、1075 年頃、李朝の名将李常傑を助けて北宋の侵攻を退けた將軍で、張公誠がチュオンゴの村人に螺鈿細工を伝授したと記されている。しかし張公誠はベトナムの基本的な文献史料や主な地誌等にその名が見えず、また本史料を史実とするために伝来、成立の経緯などのテキスト・クリニックが必要であり、現在、大谷大学・松浦典弘教授の協力を得て調査を継続している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 2件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 内田篤呉, フン・ティ・アン・ヴァン	4. 巻 45
2. 論文標題 ベトナム・フエ宮廷古物博物館所蔵の螺鈿作品	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 漆工史	6. 最初と最後の頁 22～29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 高田知仁	4. 巻 45
2. 論文標題 一八世紀タイ国の寺院扉における説話と螺鈿文様	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 漆工史	6. 最初と最後の頁 8～21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	室瀬 和美  (Murose Kazumi)		
研究協力者	高田 知仁  (Takata Tomohito)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	フン ティ アン ヴァン (Huynh Thi Anh Van)		
研究協力者	岩崎 望 (Iwasaki Nozomu)		
研究協力者	長谷川 浩 (Hasegawa Hiroshi)		
研究協力者	田中 健太郎 (Tanaka Kentaro)		
研究協力者	本多 貴之 (Honda Takayuki)		
研究協力者	松浦 典弘 (Matsuura Norihiro)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関

ベトナム	フエ宮廷古物博物館			
タイ	サイアム大学			